

居合わせ

高齢者の住まいと子どもの居場所を併存させた 「緩やかな交流」と使える避難所の提案



ただいま、が集まる場所 子どもと親が外で遊び、子どもたちが駆け回る。みんなで育てた野菜が並び、建物の近くまで車を寄せるロータリーが日常の立ち寄りやすさを支えている。理由がなくても「来てしまう」を受け止める場。



居るの近くに設けた緑地。地域のひととそこに住む高齢者があそびをする。



相談事が集まる、みまもりステーション ここでは、地域の人のちょっとした困りごとをここで働く子どもを持つ親が受け止める。日常の延長上で助け合いが行われる。

01 背景

■ 少子高齢化



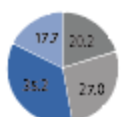
50.3%
旭地区高齢者

内閣府 令和7年度高齢社会白書（全体版）、総務省 国勢調査及び国勢調査補報・人口動態研究所

日本では少子高齢化が進行しており、高齢者人口の増加は全国的な課題となっている。特に地方や山間地域ではその傾向が強く、本敷地である豊田市旭地区も、市内の中で高齢化が進んでいる地域の一つである。

■ 高齢者と子どもの関わり

日常生活で若い世代と交流関係があるか



■ よくある ■ たまにある ■ ほとんどない ■ 全くない

52.8%
関わりなし

内閣府 平成15年度高齢者の地域社会への参加に関する意識調査の結果

高齢者と子どもが日常的にかかわる機会は決して多くない。交流の多くは、年に数回の行事やイベントに限られ、普段の生活の中で自然に顔を合わせたり、同じ空間で過ごしたりする場は少ないのが現状である。

■ 山間部



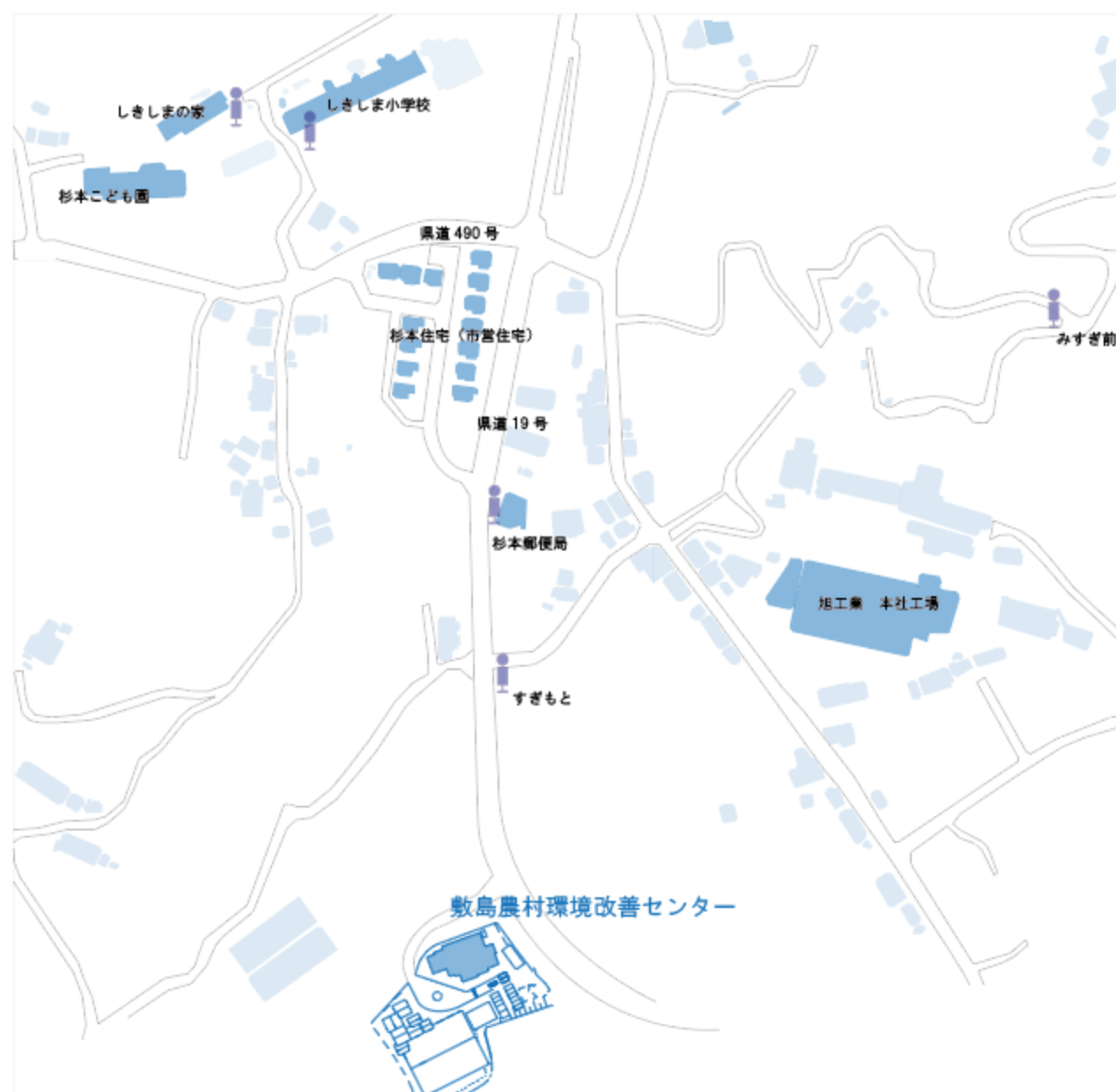
避難計画
75.0%
策定していない

調査によると、災害時の避難計画を事前に策定していない人は全体の75%以上とされている。多くの人が、避難の必要性は感じていても、「どこへ、どのように避難するか」を具体的に決めないまま日常を過ごしているのが現状である。

02 目的

本研究では、高齢者が暮らす生活の場に、子どもや親世代、地域住民が理由なく立ち寄れる“余白”を持った場を提案する。日常の小さな居合わせや関わりを積み重ねることで、世代を越えた関係性を育み、非常時にも自然と人が集まる安心の拠点となることを目的とする。本施設は、「避難所」として特別に切り替わる場ではなく、日常の延長として安心を感じに來ることができる、地域の縁側のような存在を目指している。

03 敷地



04 地域調査

本研究にあたり、旭地区において性質の異なる二つの拠点を対象に聞き取り調査を行った。一つは、地域の人々が気軽に集まり関わり合う場づくりを行っている「つくラッセル」であり、もう一つは、高齢者の日常生活を支える高齢者施設「ぬくもりの里」である。

■ つくラッセル

■ つくラッセルとは

豊田市旭地区を拠点に、地域の人々が自然に集い、関わり合う場づくりを行っている取り組みである。高齢者や親世代、子どもなど、多様な立場の人が地域の中で役割を持ち、無理のない形で関係を続けていくことを大切にしている。



旭地区の拠点となった小学校



カフェ校長室

取り組みの例



竹藪に目を向けたメンマづくり



みそづくり



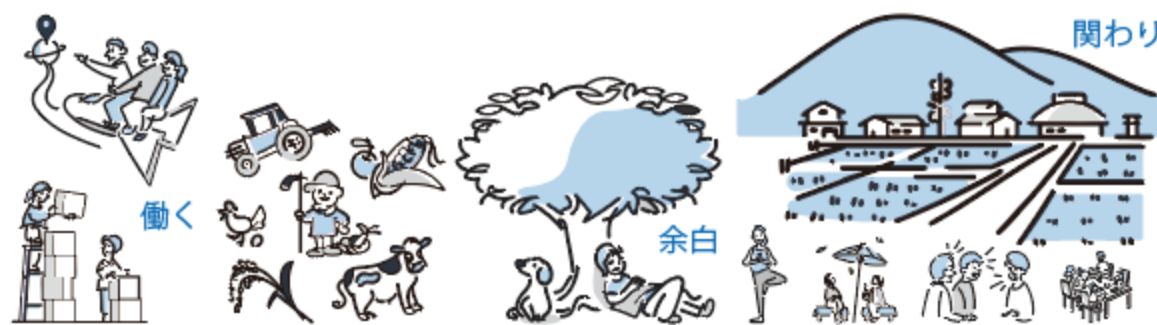
訪問介護



合唱団

■ 学んだこと

学んだことは、「働くこと」を成果や収入だけで測らず、人と人が出会い続けるための仕組みとして捉える視点である。地域の中で働くことで移動の負担が減り、日常的な会話や顔見知りの関係が自然に生まれる。また、明確な目的がなくても立ち寄れる余白のある空間が、人を無理に結びつけるのではなく、偶然的居合わせや緩やかな関わりを積み重ねていく。つくラッセルの取り組みから、強いコミュニティを目指すのではなく、参加も離脱も自由な関係性こそが、地域の持続性につながることを学んだ。



■ ぬくもりの里

■ ぬくもりの里とは

豊田市旭地区・池島町屋ヶ平にある老人福祉センターで、利用対象は主に市内在住の60歳以上の方である。デイサービス（通所介護）を提供する「ぬくもりの里デイサービスセンター」も同じ施設内にあり、日帰りで介護支援や日常生活の支援が受けられる。送迎や入浴、機能訓練などのサービスがあり、利用者が安心して地域で過ごせるようになっている。

■ 事例調査

旭地区にある高齢者施設「ぬくもりの里」への聞き取り調査から、日常的な交流や居場所づくりに関する課題と可能性が見えてきた。施設では、ボランティアによる演奏会や夏祭り、子どもたちとの世代間交流が利用者の楽しみとなり、外部との関わりが生活の張り合いにつながっている。

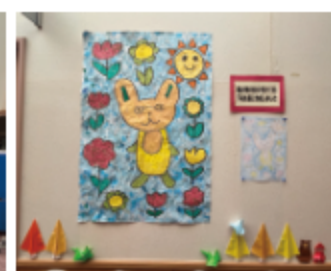
特に印象的だったのは、コロナ禍以前に行われていた「寺子屋」の取り組みである。夏休みに子どもたちが施設で宿題をし、地域の中で一日を過ごす活動が長年続けられていたが、現在は実施されておらず、その継続の難しさや日常的な関わり的重要性がうかがえた。

また、利用者の中には「帰りたくない」と感じる人もおり、日中利用に限らない滞在の場へのニーズがあることが分かった。一方で、住宅が点在する地域特性から送迎に時間がかかるという課題もある。

これらの聞き取りから、旭地区ではイベント的な交流だけでなく、日常の延長として人が自然に居合わせ、地域の中で過ごす時間を支える拠点が求められていることが明らかになった。



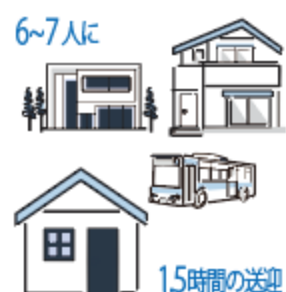
ロビー・展示コーナーの様子



小学生が書いた絵をもとに高齢者が切り絵を作成



浴室



高齢者住む



令和版寺子屋

05 コンセプト

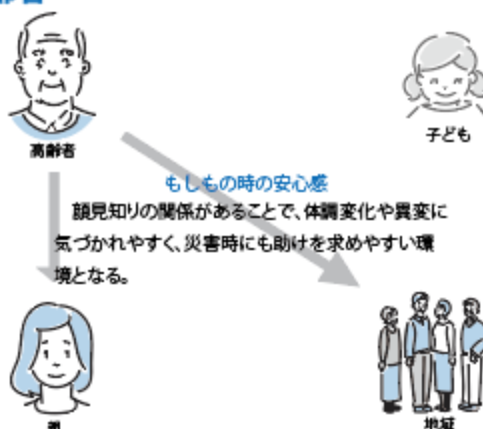
普段から関わるからこそ、

緊急時も迷わず集まれる地域の縁側となる居場所

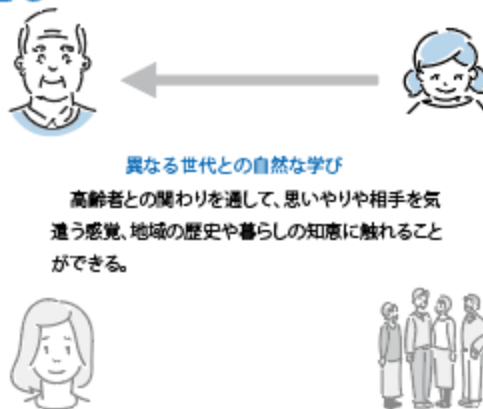
高齢者が暮らす日常の場に、子どもや親、地域住民が理由がなくても立ち寄れる「余白」を作り、体操や食事、おすそ分けといった日常の行為が自然に重なり合う関係を育てる。こうした日常の居合わせが積み重なることで、少し不安を感じる日にも、避難勧告の有無に関わらず、自然と足が向く場所となることを目指す。

06 この場で過ごすメリット

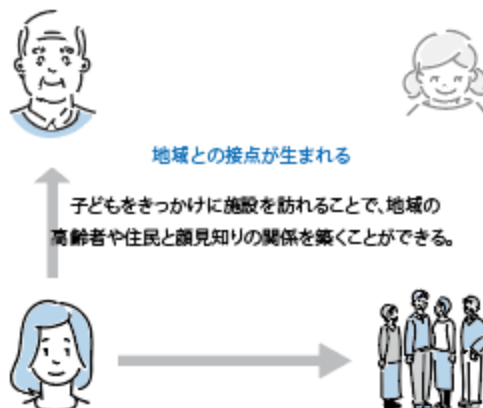
■ 高齢者



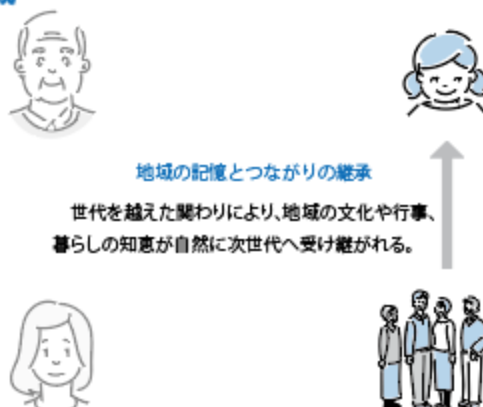
■ 子ども



■ 親



■ 地域



07 年中行事

年中行事や学校行事は、発表や催しとしてではなく、日常の延長として小さく取り入れることで、世代を超えた関わりをのきっかけとする。

■ 春 ひな祭り 入学、進級を祝う会 種まき



■ 夏 セタ 夏祭り 昼間解放 day



■ 秋 合唱コンクールの練習 and 披露 収穫祭 敬老の日

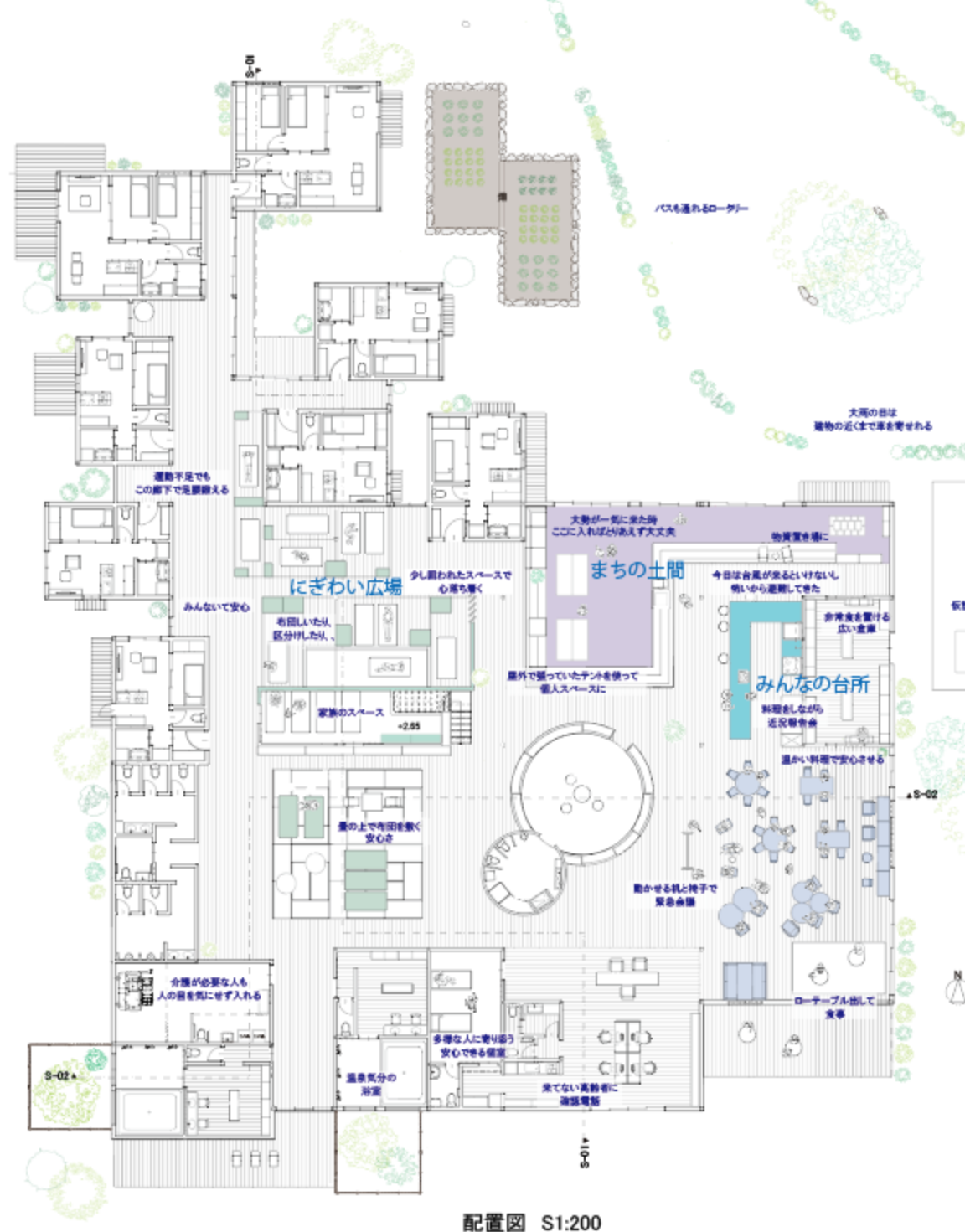


■ 冬 餅つき クリスマス会 節分



居合わせが育てる日常の関係性と、
可変的な空間による非日常への対応を重ね合わせ、
「使われ続けること」自体が防災につながる建築を提案する。

非日常・もしもの時



高齢者が日常的に暮らし、地域住民が普段から出入りしている場所であるからこそ、非常時に限らず、不安を感じた段階で自然と人が集まり、互いの無事を確かめ合える。

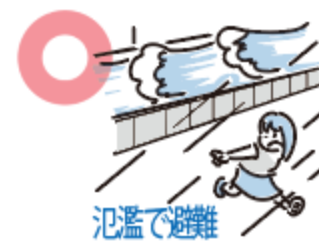
立地条件と住民構成を踏まえ、
本施設では「避難指示が出たときに集まる場所」だけでなく、
「何かあったかもしれないと感じたときに、安心を求めて立ち寄れる場所」
としての役割を重視した。

・日常以上・非常時未満から災害時まで対応できる空間の可変性



ひとり家の中

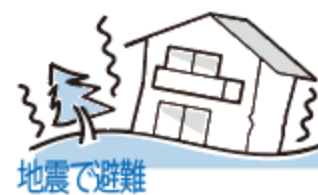
旭地区では、避難勧告が出ていなくても、大雨、地震の直後、夜間の不安など、判断に迷う場面が多い。そのときに、普段から使い慣れている場所であれば、心理的なハードルなく集まることできる。



氾濫で避難



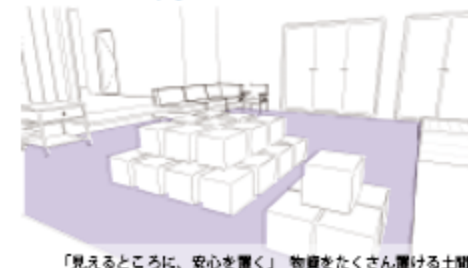
大雨で避難



地震で避難

・いざというときに開かれる居場所

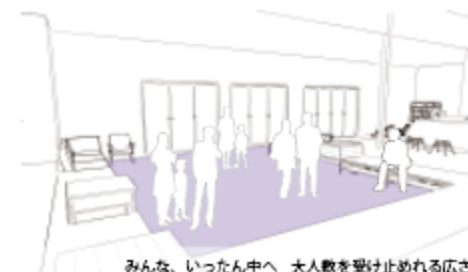
■ まちの土間



「見えるところに、安心を置く」 物資をたくさん置ける土間



テントでつくる個人スペース

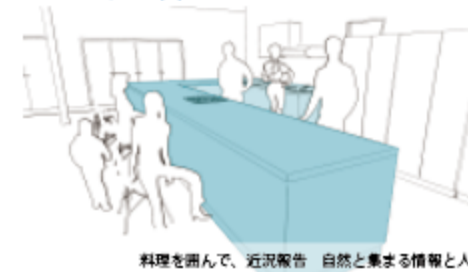


みんな、いったん中へ 大人数を受け止める広さ



今日は、外じゃなくてここで避難

■ みんなの台所

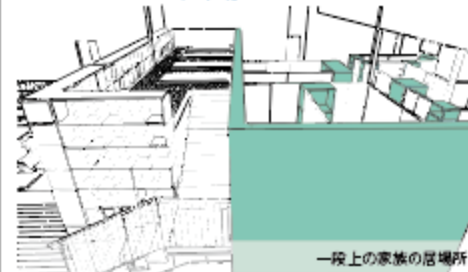


料理を囲んで、近況報告 自然と集まる情報と人

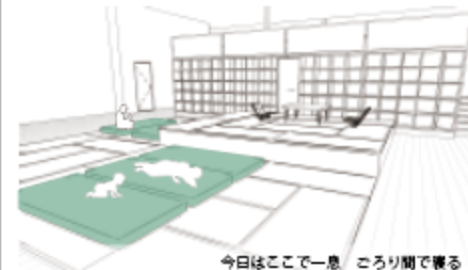


いつもの延長の、たくわえ いつのまにか安心が積み重なる

■ にぎわい広場



一段上の家族の居場所



今日はここで一息、ころり間で寝る

対象敷地は、愛知県豊田市旭地区・杉本町の
数島農村環境改善センターの広場である。



敷地周辺には、こども園・小学校・中学校が徒歩圏内に集積しており、子どもから高齢者まで多世代が日常的に行き交う地域特性を持つ。

また、本敷地は旭地区の主要動線である県道に面しており、山間部に位置する旭地区の中でも比較的アクセス性の高い立地である。周辺の生活道路の一部には、地震や豪雨時の崩落リスクが指摘されており、道路寸断が生じた場合には高齢者や要支援者の移動・避難が困難になる可能性がある。

その中で本敷地は、県道から直接アクセスできる立地条件を持ち、災害時においても人が集まりやすい拠点性を備えている。

さらに、既存の公共施設に隣接する広場であることから、地域住民にとって馴染みのある場所であり、日常的な利用と非常時の利用を切り替えることなく受け止められる点も本敷地の特徴である。これらの立地条件を活かし、日常の居場所と「もしもの時の安心」が重なる場として本計画を進める。



しきしま小学校

杉本こども園



集合住宅

数島農村環境改善センター

・日常の延長線上にある「居合わせ」を生む空間構成



視線



音



気配

居住スペースは半公開的な縁側の領域を介して地域と接続することで、生活の安心感を保ちながらも、外との関係を閉じすぎない構成とした。

・生まれる居場所

■ まちの土間

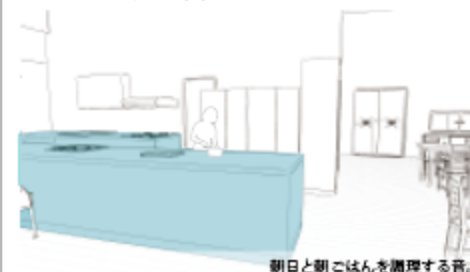


これ、今朝とれたんだ。みんなで食べてよ。



誰かに使ってほしいな、で置く構。で始まる関係。

■ みんなの台所

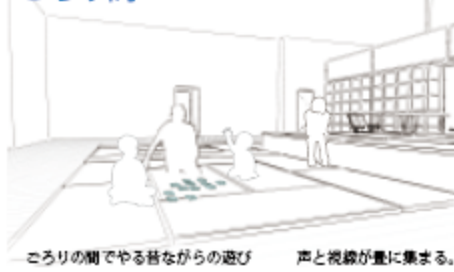


朝日と朝ごはんを調理する音

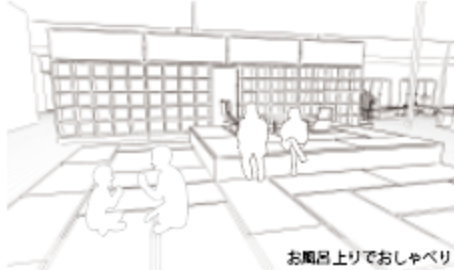


ただいまのおやつ 安心とおいしさ

■ ざろり間

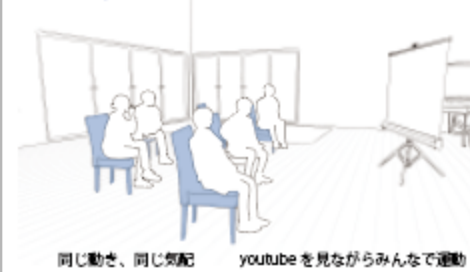


ころりの間でやる昔ながらの遊び 声と視線が量に集まる。

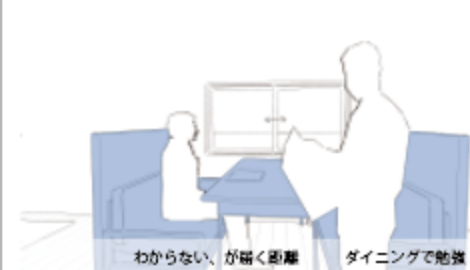


お風呂上りでおしゃべり

■ ダイニング



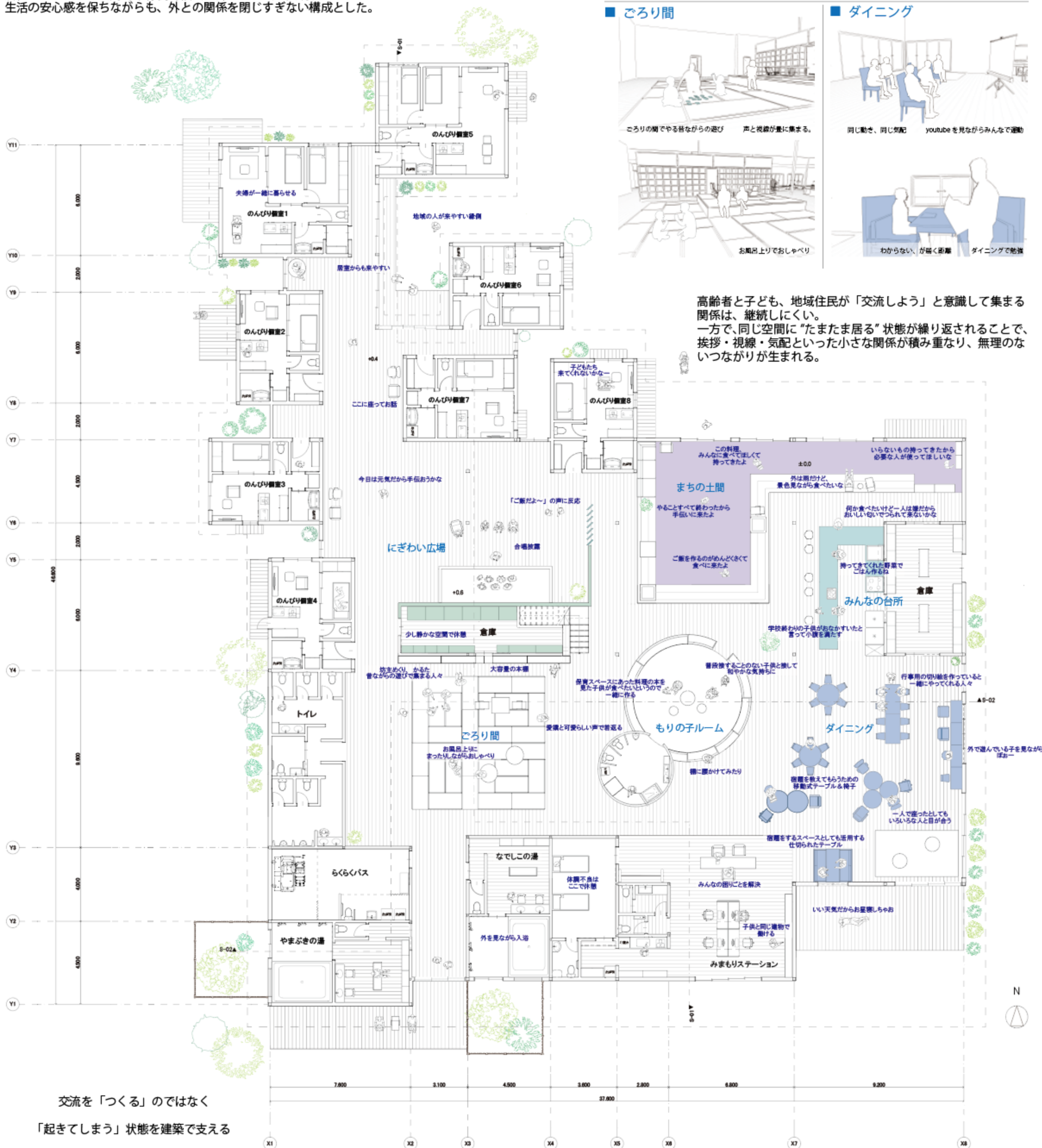
同じ動き、同じ気配 youtubeを見ながらみんなで運動



わからない、が聞く距離 ダイニングで勉強

高齢者と子ども、地域住民が「交流しよう」と意識して集まる関係は、継続しにくい。

一方で、同じ空間に“たまたま居る”状態が繰り返されることで、挨拶・視線・気配といった小さな関係が積み重なり、無理のないつながりが生まれる。





北立面図 1:100



東立面図 1:100



人が寄り添うにぎわい広場 横や布を使って空間をゆるやかに仕切り、それぞれが落ち着ける居場所をつくる。にぎわいの場はそのままに、距離感や居方を覚えることで、人が安心して寄り添える空間へと変化する。



非常時の集まって、話し、決める場 日常から使い慣れた場所だからこそ、立つ場所を変えた景観の出し合い。



あそぼう、が広がる場所 子どもと高齢者、そして子ども同士の関わりが濃くなっていく。



声がひらく、にぎわい広場 子どもたちの歌や劇が広場に響き、それを高齢者や保護者が見守る。表現する声が場をひらき、人が自然と集まる、日常の賑わいの風景。



こもり間で本を読み、視線や台詞でつながる高齢者と子どもの居合わせ。見るとよ、が隔く距離



おいしかった記憶が人を集める



遊びに来たよ、の笑顔



S-01 断面図 1:100



S-02 断面図 1:100